

『日本外交文書』編纂の思い出

元『日本外交文書』編纂委員・筑波大学名誉教授 臼井 勝美

私が『日本外交文書』の編纂官として外務省に入省したのは、昭和二四年のことです。京都大学を卒業し、東京で就職したいと考えて、当時文部省教科書局にいらした箭内健次先生にご相談したところ、先生ご自身が以前お勤めだった外務省の「外交文書室」がよいのではないかと紹介してくださったのです。たまたまポストに空きがあつて、すぐに採用していただきました。

当時外務省は戦前の霞ヶ関の庁舎が戦災で焼けてしまったために、港区田村町（現在の西新橋二丁目）の「日産館」を使用していました。「外交文書室」はそのビルの二階にありました。

当時の「外交文書室」では明治二〇年前後の編纂を行っていたと記憶しています。先輩には、長岡新治郎さんや大山梓さんがおられました。お二人とも「先輩・後輩」の意識が希薄な方なので、随分と気楽な思いをさせていただきました。

また、文書課記録班には栗原健さんがいらして、書庫から記録を借り出す都度、鍵をお借りするために栗原さんを訪ねました。記録班には他にも職員が大勢いて、記録の配架場所などについて把握されていましたが、その記録が歴史上のどのような事件と関係があるのか、つまり

記録の中身について一番理解している方は栗原さんでした。

そして栗原さんからお借りした鍵を持って向かった書庫は、霞ヶ関の庁舎の焼け跡にありました。鉄筋コンクリート四階建、昭和一七年の外務省火災や同二〇年の東京大空襲で外務省庁舎が全焼した際にも記録を守った堅牢な建物です。ただし、日産館からはかなりの距離がありましたので、編纂で記録を使用する際や、外部の研究者が閲覧を申請した場合には、書庫まで記録を取りに行くのは我々の役目で、それがなかなかの重労働でした。一度に運べる記録はファイル五〜六冊分、それを持参した風呂敷に包んで長い棒に通し、棒の両端を二人で担いで運びました。それでも編纂に使用する場合には、まず書庫でじっくり記録を目を通して慎重に選びますから、必要な記録を持つてこられるのですが、閲覧用については、利用者は目録にある件名の情報だけで記録を選びますので、一所懸命に担いできた記録をお渡ししても、ものの数分で閲覧を終了し、「次のファイルを出して」と言われてがっかりすることも度々ありました。

私が『日本外交文書』の編纂を行うにあたって心がけたのは、自分の好みだけで史料を見ないということでした。外務省記録においては、

思いがけないファイルに思いがけない文書が収まっていることが多いのです。ですから、一見して自分の探している記録ではないと思っても、一応ページをめくるぐらいのことは必要だと思っていました。

それでも若い頃には、どうしても自分が見て面白いと思う史料を先に見てしまうのです。当時編纂した『日本外交文書』をあらためて見てもみすと、自分では極力客観的な視点で文書を選んだつもりでも、好みが出てしまっていたり、なんだか妙に気取った編纂をしていたりしていて、気恥ずかしくなることがありました。

そうした中で、我々が模範としていたのは、長岡さんの編纂です。あまりに公平な編纂は面白みがなくなるものですが、長岡さんの編纂した『日本外交文書』は、好感を感じさせつつ、非常にバランスがとれているのです。今でこそ、東京から遠隔地にお住まいの方でもインターネットなどを通じて史料を閲覧することができますが、当時、地方在住の研究者は、大学の図書館などで『日本外交文書』を読んで、それを手がかりにはるばる原史料の閲覧にやってきました。そうした方たちのためには、『日本外交文書』を偏頗なく作るということが大事でした。

よい研究者とよい編纂者というのは全く異なるものです。私は大学に転出した後、編纂委員として特集「満州事変」の編纂に携わりましたが、これは以前から研究者として取り組んでいたテーマでした。以前研究者として見た記録を再度編纂者の目で見ることになりましたが、やはり目の付け所も、目を通す史料の量も違いますから、新たな発見

があるわけです。また、見つけた文書を採録候補から外してしまった場合、その史料を他の研究者が自力で見つけることはなかなか難しいことも分かっていましたので、そうした点でも、編纂者としての責任を感じました。

どれだけ公平であろうとしても、編纂者にも個性はありますから、たとえ同じ記録を見てもそれぞれに選ぶ文書には差が出ます。しかし、編纂者としての経験を積んでいくうちに、一〇の史料があるとして、そこから五つ選ぶ場合には、同じ文書を選ぶようになるのです。『日本外交文書』の編纂においては、そこで採録されなかった文書が別の機会に選ばれるということはずなないわけですから、選文の作業には十分な慎重さが求められると思います。

私が編纂者としての仕事を振り返って、とりわけ世に出せてよかったと思うのが、『日本外交文書』の別冊として昭和三〇年に刊行した『日本外交年表並主要文書 上・下巻』です。こうしたものがあれば自分にとって便利だし、他の研究者にも便利であろうと思い、提案したところ、当時外交文書室長だった栗原さんをはじめ、みんながすぐに賛成してくれたのです。年もまだ若かったので、まさに怖いもの知らずといったところですが、ほとんど一人で文書を選び、校正もやりました。それこそ、タイトルを付けるのにも非常に苦労しました。なかなか「並（ならび）」という字が出てこなかったのです。今から考えますと、よく物怖じせずに出せたな、と思いますし、後押ししてくださった「外交文書室」の方々には感謝しています。